



印刷技術の発明がもたらした中世宗教改革と現代マルチメディア革命

大塚 喜弘*

Yoshihiro OHTSUKA*

現在、主にパソコンを使って利用されているインターネットをさらに広く活用するため、第3世代のインターネットの開発に乗り出す。2003年をめぐりにテレビ、携帯電話、ゲーム機といった情報家電に接続できるようにし、2010年にはコンピュータを使ったすべての電子機器がプラットフォーム(情報基盤)になる“スーパーインターネット”の実現を目指す。これは郵政省が平成11年6月1日に決めた内容を朝日新聞が報じたものである。

この背景には、インターネットの急速な普及によって、北米を旗頭に通信需要の爆発的増加が続いていることが挙げられる。現在、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、電話、ファックス、電子メールなど、我々を取り巻く電子機器は、相互に関係なく利用されているが、今後は、音声や画像のデジタル処理技術の飛躍的發展によって、これらの多様な情報メディアの総合的・一体的な運用が期待されている。それによって、文字や静止画像のみでなく、高精細動画までが、インターネット上を自在に行き交う全く新しいフロンティアが開かれようとしている。

このように、光ファイバ通信や衛星通信などを基盤とした高度情報化社会の実現が目前に迫っている。だが、マルチメディア革命が多様な個人や組織を内包する社会や国家に対して、どのような形態で何をもたらすのか、また、どんな影響を与えるのか、等々、予見や予想を交えた議論百出である。これを契機に、情報革命という観点から人類の辿った過去に遡り、歴史の中に何らかの教唆を見出せば幸いである。

歴史上、情報革命とも言うべき事変にグーテンベルグの印刷技術の発明とマルチン・ルターの宗教改革が挙げられる。グーテンベルグは1440年活字による印刷技術を完成し、その技術はドイツを中心に全ヨーロッパに瞬く間に普及した。特に、1450年代に42行聖書や36行聖書の印刷を行ったことで有名である。今流に言えば、彼の印刷技術は正に、当時の社会に情報革命をもたらしたもので、暗黒社会を打破して、近代社会への扉を開き、マルチン・ルターの宗教改革を成功に導いた原動力となった。

15-16世紀の中世ヨーロッパは、教会が絶対的権力を掌握して、一般大衆を支配していた暗黒時代と言われる。教皇を頂点とする教会の権力者たちが、自己の利益のために免罪符を勝手に販売したり、神の教えとしての教義を都合のよいように解釈して、権力を乱用していたのである。彼等の姿にルターは憤慨するとともに、激しく抵抗し、1517年ウィッテンベルグ城教会の扉に、宗教のあり方を問う95条の提言を掲示した。彼は、神の言葉としての聖書のみを尊重すべしと主張し、墮落した権威者達に敢然と挑戦したのである。

この時代、言わば情報源としての聖書は希少財として、権力者達の独占するところとなり、その上、複製はもっぱら人手による写本でなされていた。彼らの墮落した背景には、聖書は教会の奥深くに秘蔵され、一般信徒の目に触れる事も無く、人々は、権力者の言葉を信ずる他はなかったという事情がある。

このような状況にあって、グーテンベルグの印刷機は聖書の印刷を始め、聖書の教義を共通の“情報”として、あまねく、一般の人々に提供したのである。これを追い風に、やがて、ルターの宗教改革は成功し、中世の暗黒時代は終焉を告げ、歴史の歯車は近世に向けて廻り始めたのである。グーテンベルグの印刷技術は活字文化を生み、想像を遙かに越えた情報革命をもたらす事となった。学校教育の普及は人々の識字率を高め、文書による情報の蓄積や送受が可能となった。同一情報を共有する社会や産業構造が次第に醸成され、やがて、近代的な民主国家の成立に至るのである。

現在のマルチメディア革命は、正に、グーテンベルグの印刷技術のもたらした16世紀の情報革命にも匹敵するのではなからうか。そして、21世紀という時代は、国家という枠組みは堅持されるものの、政治、経済、社会の全ての仕組みが変革され、個人が世界と直接的に、かつ、多彩に結ばれた地球規模での人類社会が実現されるのではなからうか。

* (株)モリテックス先端技術研究所 (〒225-0012 神奈川県横浜市青葉区あざみ野南1-3-3)

* Moritex Institute for Advanced Technology, 1-3-3 Azamino-Minami, Aoba-ku, Yokohama, Kanagawa 225-0012